第５号に寄せて

吉　見　孝　夫

『イソップ資料』第５号をお届けします。元々は、１年間に２回の刊行をもくろんでいましたが、力不足や怠け癖故に前号までは年１回となってしまいました。多少時間に余裕ができ、ようやくセミアニュアルが実現した次第です。今号は、金沢市にある前田土佐守家資料館所蔵の『影模蘭文絵入伊曽保物語断簡』の特集となりました。同資料館、取り分け学芸員の竹松幸香氏のご高配には深く感謝申しあげます。

内田慶市氏の『漢訳イソップ集』（ユニウス、2014 年２月）が刊行されました。中国語に翻訳された 22 種のイソップ寓話集の影印に、ご論文「イソップ東漸―中国語イソップ翻訳史」を付したものです。20 世紀初頭までの漢訳イソップ寓話集が網羅されています。

私的な感慨を述べることをお許しください。最も古い『况義』は写本で伝わっていますが、フランス、イギリスにしかなく、目にするのを諦めていました。それがここには現存する４種の写本すべてが収録されています。『意拾喩言』は、これまでにインターネット上のアーカイブと天理図書館蔵の刊本を見ました。しかし前者は細かな文字が読めません。後者はページを繰る度に紙片がこぼれる状態で、じっくり閲読するのも憚られます。今回収録されたのは善本といってよく、文字も明瞭に読み取れます。前号の小論「随感　『北京官話伊蘇普喩言』の訳者中田敬義に関する覚書」では、『伊娑菩喩言』の上海施医院版を見ていないと書きましたが、この上海版もまた収録されています。僅かの時間差で本書を参照することができなかったのがいささか残念です。『况義』といい『伊娑菩喩言』といい、一つの写本や版でこと済ませず、他の写本や異版を広く求めて載せているのも、本書の価値を高めていると考えます。ご論文「イソップ東漸」を読めば、中国におけるイソップ受容の過程が理解されます。

『昭和天皇実録』が公開されました。1912 年（明治 45）３月 16 日にこの満 10 歳の作者の名を冠して「裕仁新イソップ」と命名された寓話が存在し、また翌大正２年１月 18 日には「白熊と獅子」という創作が学友の前で語られたとの報道に接し、早速宮内庁書陵部での特別閲覧に参じました。寓話そのものが載っているわけではないことを知りました。

この時期はイソップブームと言ってよいほどに翻訳が刊行されています。20 世紀になってからのものを挙げると、1902 年西村酔夢『少年世界文学第五編　イソップのはなし』（冨山房）、1907 年上田万年『新訳伊蘇普物語』（鐘美堂）、佐藤潔『正訳伊蘇普物語』（小川尚栄堂）、雨谷一菜庵『イソップ物語』（吉川弘文館）、1908 年百島冷泉『イソップ物語』（内外出版協会）、1909 年中村徳助『新訳解説伊蘇普物語』（精華堂）、1910 年西方寒川『教訓叢話イソップ物語』（井上一書堂）、中川柳涯『ポケット伊蘇普物語』

（日吉堂）、馬場直美『ポケット新訳イソップ物語』（岡村盛花堂）、1911 年西垣堯則『伊蘇普物語二百話』（立川文明堂）、稲葉翠浪『新式イソップものがたり』（慶文堂）、巌谷小波『イソップお伽噺』（三立社）、菅野徳助・奈倉次郎『伊蘇普物語』（三省堂）といった具合です。その他英語の自習書などもあります。1903 年の第一期、1909 年の第二期の国定の読本、修身の教科書にもイソップ寓話がいくつも取り込まれています。少年少女向け雑誌での連載もあります。1903 年の巌谷小波『明治お伽噺　新伊蘇普物語』（博文館）のように、全くの創作なのに「イソップ」の名を持つものも出てきます。こういった環境にあって、「よし自分でも作ってみよう」と思い立った子は一人、二人ではないはずです。しかし、文学少年少女と呼ぶには幼過ぎる児童たちの作品を百年後の今読むことは叶いません。殆どが埋もれてしまった幼い文学的営為の一片が今ここに奇跡的に出現したことを、明治、大正の子どもたちのために喜びたいと思います。幼少文学というジャンルがあるならば、それを伝えている点で、『徒然草』第六二段にある延政門院の「ふたつ文字……」と並ぶ記録と言えるでしょう。

第４号にもいくつかご教示を賜りました。専門の視点から丹念にお読みいただいているのが遠藤潤一氏です。遠藤氏からの芳翰が届く度に、どのようなお教えをいただけるのかという期待と、とんでもない錯誤を指摘されるのではないかという不安とが湧きあがります。今回『絵入朝野新聞』に掲載された『伊曽保物語』及びその原本である天理図書館蔵巻子本『伊曽保物語』につき貴重な示唆をいただきました。また私の過誤を見つけてくださいました。お礼申しあげます。

ご自分の研究分野とは何の関連もないにも拘わらず、注意深く読んでくださっているのが、昨年まで同僚であった中国古典文学を専門とする後藤秋正（あきのぶ）氏です。気を抜いた表現には、容赦のない叱責の言葉を浴びせる手練れの読み手です。私にとっては有り難い（感謝を表したいという意味で、また稀有だという意味で）存在です。前号の漢文中に誤字があること、その書き下し文に原文と一致しない点があることを指摘されました。その中には、恥ずかしいことに、置字の「矣」を「牟」とするという、出来の悪い高校生がしでかすような誤字も含まれます。誤変換だとパソコンに八つ当たりするわけにもいきません。また版下はすべて私が準備しておりますので、誤植だと印刷所に責任を転嫁する逃げ道もありません。後藤氏にもお礼申しあげます。

小誌の刊行に多大のご助力をいただいている中務哲郎氏の新訳『アンティゴネー』（岩波文庫、2014 年５月）が出版されました。これ自体はイソップと関係ありませんが、同書の「解説」に「『イソップ寓話』が古代社会でどのように活用されていたかを窺わせる意味でも興味深い話」が載っています（163、164 ページ）。詳しくは直接お読みください。ついでを以ていえば、これまでの訳と比べると、アンティゴネーの言葉遣いが大部異なります。、この差異は、訳者がこの戯曲をどう理解するかの違いに由来するのだろうと、門外漢は勝手に解釈しています。